

いのちいっぱい 感動いっぱい ～ ありがとうの旅を続けよう！～

明けましておめでとうございます。今年も本校教育活動に御支援御協力いただきますよう、どうかよろしくお願いいたします。

はじめに、1月1日に起こりました能登半島地震でお亡くなりになった方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災地の皆様に心よりお見舞い申し上げたいと思います。被災地の日も早い復旧復興を心よりお祈りしております。

山内アナウンサーからの学び ～3学期始業式式辞より～

(前略) 今年のお正月は、日本に住む私たちにとって、忘れられないお正月となりました。1月1日16:10、石川県を中心にした大きな地震が起こりました。マグニチュード7.6、最大震度7、大津波警報が発令された最大級の地震です。

みんなが生まれる前にも、阪神淡路大震災や東日本大震災などが起こっていますが、今回の地震もそれと同じ大地震でした。被災された皆さんも、お正月で、家族の人たちとゆっくりと過ごされていたことだろうと思います。その人たちを突然襲った大地震。多くの方が家の下敷きになり、土砂に埋もれ、命を落とされました。現在も行方が分からない方々がたくさんいます。

今日はまず、みんなで亡くなられた皆さんのご冥福をお祈りし、「黙祷」を捧げたいと思います。皆さんは、「黙祷」という言葉を知っていますか。目を閉じ、何かのために静かに祈ることを「黙祷」と言います。亡くなられた方々のご冥福と被災地で今がんばっておられる皆さんに祈りを込めて、みんなで静かに黙祷を捧げたいと思います。(この後、全員で黙祷をしました。)

さて、この地震は、ここから遠く離れた石川県を中心に起こった地震ですが、私たちが、同じ国に住む者として忘れてはならないことがあります。それは、日本は、戦争もなく、平和で幸せな国ですが、「地震国」だということです。災害の中で最も被害が大きいと言われる地震。しかも、「いつ、どこで、どのように」起こるか分からない地震。私たちに一番関係するのは、近々、起こるだろうと言われている「南海トラフ地震」です。この地震は、間違いなく、今回起こった地震と同じような大きな被害をもたらすだろうと言われています。

そんなことを考えながら、先生は、今回の地震であらためて学んだことが二つありました。

一つ目は、訓練の大切さです。この音声聞いてください。(NHK 山内泉アナウンサー

の緊急地震速報の音声を少し流しました。) 先生は、この能登半島地震が起こったとき、車の中にいました。突然車の中に流れ出したこの NHK 山内泉アナウンサーの緊迫した真剣な呼び掛けに、一瞬で、「これは、ただの地震ではない。」と感じました。緊迫した彼女の放送は、東日本大震災で学んだことを生かし、「どのように伝えれば、テレビやラジオの前の人たちが真剣に聞き、実際に逃げるという行動に移してくれるか」を必死で考えたアナウンスでした。アナウンサーが読む台本には、

「大津波警報が出ました。今すぐ逃げてください。」という丁寧な言葉で書かれています。しかし、山内アナウンサーは、「今すぐ、逃げること！決して立ち止まったり引き返したりしないこと！」と語気を強め、あえて緊張感、緊迫感を感じさせるように、人々に呼び掛けました。この言い方にしたのは、緊急事態を伝える山内アナウンサーのとっさの判断でした。この判断は、緊急放送の訓練を何度も行っていた山内アナウンサーだからこそできたものです。目には見えませんが、彼女のこの絶叫によって、多くの方々の命が救われたにちがいないと私は思っています。

山内アナウンサーの緊急放送に、大きな学びを受けた私たち。その私たちが、一人でも多くの命を救うためにできることは、学校や地域で繰り返し行われているあらゆる「訓練」に参加し、真面目に、真剣に学び続けることだと思います。

もう一つは、いのちの意味についてです。

これは、地震があったからという理由だけではありませんが、この世に生を受け、今、脈々と体の中で動いている「いのち」と、いつも真剣に向き合い、いのちの意味について考えていくことがとても大切です。

私たちは、人を傷つけるために生まれたわけではありません。私たちは、人を差別するために生まれたのでもありません。私たちは、人の心の痛みに寄り添い、自分事として悲しみ苦しみながら、目の前の人を支え、共に生きていくために生まれてきたのです。今回の大地震が教えてくれたこと。それは、いのちの意味を一人一人が真剣に考え、みんなでそのいのちを守っていくことなのだと思います。



3学期は、一番短い学期ですが、一番寒くて厳しい学期です。この学期を乗り越えてこそ、本物の自分を見付けることができると思います。“冬来たりなば、春遠からじ” 平穏で温かい春を目指し、みんなの一人一人の芽吹きを願って3学期をスタートします。

サウイフモノニワタシハナリタイ

冬休みに入ってすぐに、3学期の始業式では、私の好きな宮沢賢治さんのお話を子どもたちにしようと考えていました。ただ、上記でご紹介したように、「地震のお話」を優先と考え、宮沢賢治さんのお話はしませんでした。そこで、この紙面を借りて紹介したいと思います。

今日はある人を紹介します。この人です。(画像をスクリーンで紹介！の予定でした)

皆さんは、この人を知っていますか？そうです。宮沢賢治さんです。よくは知らないけれど、なんとなく見たことがあるという人も多いと思います。今日は、この宮沢賢治さん(後、敬称略)がどんな人なのかを話していきたいと思います。

賢治のお家は、質屋さんでお金がありました。質屋さんとは、物をお金に換えてもらうところです。つまり、質屋さんは裕福な家庭でなければ経営できなかったのです。そんな賢治のお家に、貧しく生活に苦労している農家の方々がお金に困って物をよく持ってきていました。その人たちと自分の家を比べながら、賢治は子どもの頃から、こんなことを考えていました。それは、自分の家が裕福で、農家の方々に申し訳ないということです。自分の家だけがお金持ちで、自慢しているようで、鼻高くなっているようで、裕福であることがとてもいやだったのです。つまり、貧しい人への罪悪感を強く感じていました。

賢治の子どもの頃には、こんなエピソードもあります。

○ ある日、赤い服を着てきた賢治の同級生が、皆に囲まれて、「メッカシ(めかしこんでいる)」とからかわれていました。すると、賢治は間に入り、こう言ったのです。

「おれも赤シャツ着てくるからいじめんならおれをいじめてくれ」と。弱い立場の友だちを、じぶんをいじめることで許してくれと頼んだのです。

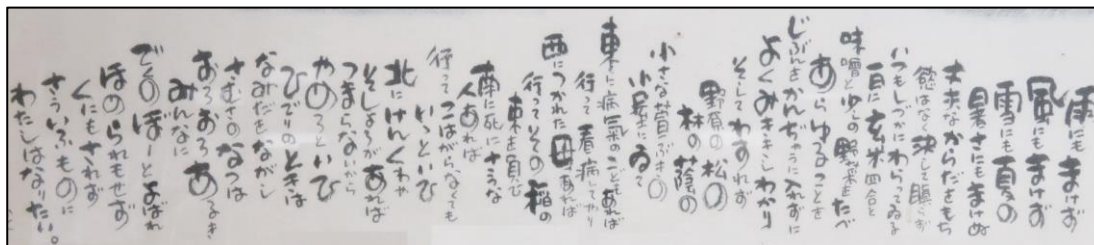
○ ある時は、メンコで遊んでいた時、仲間の一人がメンコを取ろうと転がったメンコを追って行った時、指を馬車にひかれて出血しました。賢治は、とっさにその子の手を取って、「いたかべ、いたかべ」と言いながら、その指を吸ってやったのだそうです。

○ また、いたづらをした罰として水を満杯にした茶碗を持って廊下に立たされていた友だちがいたとき、先生の用で廊下に出てきた賢治はその友だちを見付けて「ひどい、大変だろう」と茶碗の水を飲み干してやったのだそうです。

○ こんな話もあります。賢治は、30歳まで学校の先生をしていました。ところが、給料がよかった先生であることに引け目を感じ、学校の先生をやめてしまいます。そしてボランティアグループを立ち上げ、収入のほとんどない生活を選びます。食べる物も決して贅沢をせず、人のために生きる生き方を選びます。

この四つのお話からも分かるように、賢治は、人が辛い生活をしていたり、つらい思いをしていたり、困っている場面に出会ったりしたとき、まるで人の苦しみを自分のことのように受け止め、自分がその身代わりになって痛みを受け止めたいと感じる人だったのです。

賢治は、若くして病気で亡くなりますが、「人のために尽くす」「人のために生きる」という考えを、ある詩に書き留めていました。みんながよく知っている「雨にも負けず」という詩です。



この『雨ニモマケズ』で語られる人物は、自分を厳しく見つめ、反対に他人に対し優

しい気持ちを持ち、実際にその人のために行動できる人、そして、時に挫折し落ち込みそうになりながらも、前を向いて歩いて行く人の姿を書いています。賢治は、「そういう者に私はなりたい」というフレーズの中で、人間にとって「本当の幸せとは何か」を今の世に問い続けています。

実は、この詩は、賢治が亡くなった後に発見されたものです。病に倒れていた賢治ですが、死ぬ間際まで、人のために生きたいと思い続けていたことが伝わってきます。

年が新しくなっても、私たちの悩みや苦しみは変わりません。しかし、この詩の中には、その悩みや苦しみを乗り越えるヒントがあります。人との交わりを大切にしながら、しっかりと前へ進みましょう。